

描く

相原小学校 六年

橋爪はしづめ 咲耶さくや

とある所にA氏という売れない画家がいた。その画家は何を描いても売れない自分が嫌いだった。どんなに努力しても有名にはなれない。そんな世の中が憎くてA氏は毎日絵を描いた。たとえ手が痛くなっても、寝る間を惜しんでも描き続けた。ある日、A氏は同じ画家であり友人のB氏に相談しに行った。

「なあB、お前はいつもどうやって作品を作っているんだ？」

B氏は答えた。

「そんなの簡単ですよ。ただ自分の好きな物を描けばいいんです。」

よく簡単に言える。そう思い苛立ったA氏はこう言った。

「お前は天才だからそんなことを軽々しく言えるんだろう。なんてったって『天才画家』だもんな。どうせ俺みたいな底辺が言う事なんてちっとも分らないんだろう？」

B氏は焦ってこう言った。

「私なりの意見を言っただけです。あと、私は好きな物や見て感動した物を描いているだけです。天才ではありません。それに、Aさんは最近おかしいですよ。毎日絵を描いてばかりじゃないですか。少しは休んでみては……」

「うるさい！！！」

A氏は怒って帰ってしまった。取り残されたB氏はただ心配そうな顔をしていた。

家に帰ったA氏は怒りが収まらず、このまま寝てしまおうと思った。しかしベッドに行こうとしたその時、急に頭が天井に向き、衝撃を感じた。起き上がって足元を見ると、使いたてのバケツとその中に入った絵の具チューブが散らばっていた。バケツには亀裂が入り、絵の具はいくつかキャップがはずれ地面に飛び散っている。新品の物までだ。ようやく事態を理解してからではもう遅い。A氏はこのどうしようもない状況に激怒し、バケツを拾い、絵の具をこれでもかという程入れて近くにあったキャンバスに投げつけた。それだけでは足りずまたもや近くにあった絵の具をぶちまけ、毛がガサガサの筆で引っ掻き、殴るようにキャンバスに怒りと色とりどりの絵の具を叩きつけていった。

何時間経ったのだろうか。我に返ったA氏はふと目の前のキャンバスに目をやる。

「これは……俺が描いたのか……？」

市長賞
橋爪咲耶「描く」

そこにあっただのは荒々しい筆さばきで語られる「怒り」だった。

「す、すごいぞ！まるでこの作品自体に感情が宿っているようだ……！」

A氏は先ほどの怒りはまるでなかったかのような顔で床に跪き、こう言った。

「明日から俺が天才画家だ！」

その後、A氏は早速大きなコンクールにその作品を応募し、そして見事に一番大きな賞を受賞したそう。世間ではA氏の作品を賞賛する声が絶えず発せられていた。

「いやー俺はなんて天才なんだろう！」

A氏はSNSで自身の作品が褒め称えられる様を見ていた。今やA氏の作品は世界を飛び回るジェット機の様だ。

（ちよつと怒って殴り描けばこんなに有名になれたんだ。きっと次もこんな風に描けば大儲けするに違いない！）

A氏は前のような努力はしなくなり、ただスマホで自分の作品への評価を見るだけになってしまっていた。しかしそんなA氏にも創作意欲までは欠けていなかったようだ。A氏は次は何を描くか考えてみた。しかし、A氏は頭の中にまったくアイデアがうかばない。きつと前のように感情が昂っていないからだろう。SNSでの賞賛の声を見たときのあの気もちを表現すればいい！と思っても一度SNSアプリを開き、賞賛のコメントを舐め回す様に見て回る。もう十分だろう。そう思いスマホからキャンバスに焦点を向ける。

……だめだ。描けない。

いくらあの見聞きするだけで天にも昇る様な心地のコメントをみても、目の前にあるのは汚れひとつない真っ白なキャンバス。ふとスマホの通知が鳴り、画面を覗く。B氏がSNSを更新していた。そういえば、あれからしばらく会っていない。B氏のアカウントに飛んでみると、一枚の絵が投稿されていた。ただの風景画だった。しかし、太陽の作る木漏れ日は見えているだけで暖かく、どこか切ない。素敵、綺麗なんて言葉では表せない絵だった。A氏は頬に違和感を感じた。涙だった。

A氏は筆を取る。今から描く物は荒々しくも、綺麗でもない、言葉なんかで表せない物。目の前のキャンバスに、汚れがついた――。

市長賞
橋爪咲耶「描く」

審 査 員 講 評 *****

創作の本質に迫る傑作でした。A氏が怒りに任せて絵を描く場面や、B氏の描いた風景画の描写など、見事な筆致で情景がありありと浮かんできました。SNSのくだりも含め、創作者なら誰もが陥りそうになることへの風刺的な側面もはらみながらも、そちらに転落していかない展開に胸が熱くなります。ラスト一文の「汚れ」という表現も素晴らしかったです。

―― 田丸 雅智